

書写の要素…鉛筆の持ち方



山梨大学教授 宮澤 正明
みやざわ まさあき



小学校二年生を担当しているA先生が、青白い顔をして校長室を訪ねました。

「校長先生、クラスの子どもたちが教室を徘徊する傾向が出てきたようです。授業中に鉛筆を削りたいと一人の子が言いだすと、それに誘われるようにして、ぼくもわたしも席を離れるのです。原因がわかりません。もしよかったら、授業を見ていただけませんか。」とのこと。

これを聞いた校長先生は、A先生と同様、好ましくない事態を予想したので、授業参観を了承しました。あくる日、校長先生は足早にA先生の教室に出かけました。いつも真つ先に席を離れる子を事前に知らされていた校長先生は、その子の近くに立って観察することになりました。しばらくすると、案の定、その子はいちばん先に席を立ち、A先生の方に向かってたのです。続いて二人、三人と席を立つ子を見届けた

校長先生は、まるで何事もなかったように慌てることなく、穏やかな表情をして教室を出て行きました。

授業を終えたA先生が、再び校長室を訪ねました。「校長先生が教室を出られた後も、何人かが席を離れていたのですが、何かわかりましたでしょうか。」

「A先生、まったく心配ありません。原因は、鉛筆の持ち方と使い方にありそうです。鉛筆で文字を書くとき、無意識にですが、できるだけとがった部分が紙に当たるように鉛筆の軸を回しながら書きますよね。席を離れる子はこれをやってないようです。だから、鉛筆が、最初はちゃんと削ってはあつてしまふ。そこで、鉛筆を削りたくなるんですよ。他の子の様子も見ましたが、同じようでした。直接の原因はこれではないでしょうか。授業中、席を立つことに寛容すぎる点にも問題がありそうですが、

先生が心配するような深刻な事態ではなさそうですよ。鉛筆の持ち方、使い方を指導してみてください。」

原因がつかめたA先生は肩の荷を下ろしたものの、これまで鉛筆の扱い方に関する指導をおろそかにしてきたことを反省しました。すぐに校長先生から勧められた鉛筆の持ち方に関する資料を調べたうえで、クラスの子どもたちの鉛筆の持ち方と、文字を書くときに軸を回転させて書いているかどうかを調査しました。そして、毎日鉛筆の持ち方や使い方について指導・助言をすることにしたのです。

.....

これは、ある小学校の校長先生とA先生のお二人からうかがった内容を再現したものです。後日談として、A先生から次のようにお話をうかがうことができました。

「その後、効果がすぐに現れることはなかったのですが、席を離れたくなっても、鉛筆の軸を回してとがったところを探す様子が観察されるようになり、子どもたちは適切な鉛筆の持ち方の意識を強め、軸を回転させて書くことへの努力を見せ始めているようです。席を離れる原因が鉛筆の持ち方にあったこ

とに驚いています。これからはしっかり指導したいですね。」と。

鉛筆の持ち方が適切でないと、確かに軸を回転させにくくなります。最近、指全体を軸にかぶせるような握り持ちや、人さし指と中指の間に軸をはさんで完全に固定して書いている児童・生徒を多く見かけます。これでは軸をスムーズに回転しながら書くことは困難です。

これまで、よい鉛筆の持ち方は、書写の教科書には必ず掲載されてきました。しかし、自分の持ち方を確認するのに、どうすればよいかわからないままになっていたようです。

光村図書十七年度版『書写』の教科書では、鉛筆のよい持ち方を単に写真で示すだけでなく、自分の持ち方とよい持ち方とを比較して確かめることができるようにしました。

●えんぴつのよいもち方をたしかめよう。

「見てたしかめよう。」

「ゆびでたしかめよう。」

というコーナーがそれです。(光村図書平成十七年度版『しよしゃ』二年4ページ)

えんぴつのもち方

●えんぴつのもち方と左手のおき方



●自分の目のいちから見たとき。



●えんぴつのよいもち方をたしかめよう。



ここでは

「鉛筆の持ち方を確かめよう。」

と声を掛け、ふさわしくない持ち方をしていないか確かめると同時に、自分の持ち方の確認ができるようにしました。

先生が、「このように持ちなさい。」と教え込むのではなく、右にあげた教科書の呼び掛けや写真・図によって、自己の課題発見、課題解決を促すことができるものと期待されます。

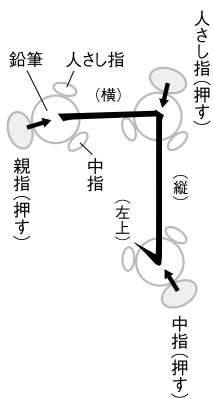
なお、鉛筆の持ち方の原理は、「小学校国語教育相談室N0.38」に掲載された本連載の第一回目に詳しく述べましたので、そちらを参考にしてください。（次ページに原理を示す部分を抜粋しました。）

ここでは、線の方角によってそれぞれの指がどのような働きをするのかを原理的に考えてみたいと思います。

鉛筆を持つ親指、人さし指、中指には、単に鉛筆を支える働きだけではなく、次に示すように、書かれる線の方角によってそれぞれが分離して異なる働きがあると考えることができます。

- 線の方角に押す（推進力）
 - ・・・自動車の「アクセル」に相当する働き
- 線の方角をコントロールする（方向制御）
 - ・・・自動車の「ハンドル」に相当する働き
- 推進力を抑える（推進力制御）
 - ・・・自動車の「ブレーキ」に相当する働き

このような考えに基づくと、鉛筆の持ち方指導に説得力が生じるのではないのでしょうか。具体的な画の方角による指の働きを図に示すと次のようになります。



線の方角と指の動きの関係図

上の関係図をアクセル、ハンドル、ブレーキの働きに置き換えて表にしてみました。

線の方角	親指		
	横	縦	左上
縦	アクセル	アクセル	アクセル
横	ハンドル	ハンドル	ハンドル
左上	ブレーキ	ブレーキ	ブレーキ

これを活用して、

「親指の先の柔らかい部分を鉛筆に当てて押してみよう。線はどっちに引けるかな？」

「人さし指を押して縦画を書いてみよう。中指はブレーキだよ。」

「縦画のはねは、どの指で押すのかな？」
などと唱えてみてください。三本の指が自然に適切な位置に置かれはじめるはずです。

鉛筆の持ち方は、そのフォームだけを指導するのではなく、指の機能と線や点画の方角との関係を原理として理解させることが早道のような気がします。

鉛筆の持ち方が固定されていない低学年では特に効果的だと思います。



「消しゴムクレーン鉛筆」の提案

身体の発達段階にある小学校低・中学年の児童が、鉛筆を適切なフォームで持つて用いることは、大人が考える以上に大変なことと思われます。十歳くらいまでは、関節や筋肉はまだ完全ではないと言われます。したがって、力を入れたつもりでも、それが十分伝わらなかったり、方向がずれたりするようです。

未発達な状態ではありますが、将来、指先の強い筋力、自由自在に動く関節を形成するためには、多少の負荷をかけて訓練する必要はありそうです。

そこで、適切な鉛筆の持ち方でなければできないうえに、指先に負荷を与える練習用具（遊び道具と考えてください）を作ってみました。上の写真のように、「消しゴム」「ひも」「鉛筆」さえあれば簡単に作れる、名づけて「消しゴムクレーン鉛筆」です。



この遊び方を紹介します。

- ① ②の状態から始め、鉛筆の軸を回転させながら消しゴムがぶら下がったひもを鉛筆に巻き取る。
- ② 軸を逆回転させながら巻き取った消しゴムのひもを元の位置にもどす。これを二往復し、要した時間計る。

この方法で、自己の時間短縮を目標にしてもよし、競争をしても楽しいと思います。これだけのことで

すが、親指、人さし指、中指を分離させて動かさないとなかなか軸を速く回すことはできません。また、繰り返し行くと、文字を書く際に鉛筆の軸を回転させることが自然に行われるようになるようです。指先の巧緻性、軸回しを習慣化するには効果がありません。

試していただいて、その効果や課題などがあればお教えください。

①



②

